

書写に夢と希望を

山梨大学教授 宮澤 正明
みやざわ まさあき

勉強意欲の喚起や授業への動機づけを目的として、私の担当する「書写演習」では、授業に臨む姿勢や将来教師になったときの書写の指導観・授業観を受講者に尋ねることにしています。

「印字機器の発達や携帯電話の普及で文字を書く機会が少なくなったが、文字を整えて美しく書くことは大切なことなのでしっかり学んで将来の指導に役立てたい」と積極的姿勢を示す一方で、次のような消極的、悲観的意見も少なからず出てきます。

- ① 私は、書道を習ってこなかったので字が下手だ。書写の実技指導には自信がない。将来、書写指導は避けられるものなら避けたい。
- ② 書写はお手本どおりに書かせなくてはならないから窮屈感がある。生徒には自由にのびのびと書かせたい。細かいことを言うような指導はしたくない。
- ③ 書写の授業は、決められた課題をただ書かせるだけだからおもしろ味がなく、国語科としての発展性や意義

もあまり感じられない。

- ④ 書塾へ行っている子がいつも高い評価をされていたような気がする。書塾に通った経験がない私はがんばって書いても評価されなかったので書写の時間は学習意欲がわずかに退屈であつた。書写に関心をもつことができない生徒に指導するのは大変だし、不安だ。

これらの意見は、大学における「書写」の授業内容や方法を考えるにとどまらず、書写教育の意義、在り方、指導方法を考える上で貴重だと思われます。

- ① から④の意見に対してコメントしたいと思います。
- 書写の授業内容の大半は、実技指導です。特に毛筆を主にしていますので、当然指導者は生徒の前で書いたり直したりすることが要求されます。毛筆の学習経験が浅ければ自信をもって指導・助言をすることは難しいことかもしれません。

ここで確認しておきたいことは、書写の目標は文字を正しく整えて速く書くための方法（原理や原則）を学ぶ

ことであって、手本（手本という絶対的価値をもった存在と受け止めやすいので、「めあての基準となる教材・学習材」ととらえた方がよいように思います。以下、本文では仮に「教材」とよぶことにします。）とまったく同じように書くことを目ざすのではなく、ましてや展覧会出品や教室への掲示作品を目ざす活動ではないということです。したがって、教師が「教材」と寸分も違わず書いてみせる必要はないのです。本時で学ぶ原理や原則は何なのか、その部分だけを取り上げて書いたり解説したりすることが重要となります。むしろその方が目標の焦点化につながる場合が多いのです。

とはいえ、教師が書写の知識、実技力向上を図るための努力を怠ってはならないことは言うまでもありません。このことは書写だけでなく、どの教科内容であってもまったく同じことが言えるのではないのでしょうか。

● 小・中学校の書写はいずれも国語科の言語事項でありながら、学習指導内容が毛筆を主とした学習であることから、ややもすると国語科の他の学習内容とは異質なものととして考えられることがあります。

文字を正しく整えて速く書く技能（書写力）は、文字を書く活動のすべてを支える基盤となっていることを確認したいと思います。私たちは何らかの情報を他者に伝えるために文字や文章を書きます。その際、誤った字体

誤読されるような字形、独りよがりな速書き文字、乱雑な配列・配置などで書かれた文字・文章は言語として正確に伝達したことになるでしょうか。適切な言葉の使い方、正確な情報内容の吟味などとともに、書写力は言語活動、情報伝達を円滑にするための大きな支えとなっているのです。読みやすく書くこととする心がけは、何よりも他者に対する思いやりにも通じることとなります。

● 教材文字に限定されることが多い書写学習ですが、例えば、教材でめあてとなる原理・原則を理解した後、それらを含む他の文字を探し、各自異なる文字によって学習したらどうでしょうか。学習めあてが自覚できず、コピー作業を繰り返す受け身の学習に比べて、文字探し活動は自主的学習であり、めあてを焦点化することにつながり、さらには応用・発展をも期待することができそうです。一例ではありますが、このような学習方法は評価も変えていきます。提出されたいわゆる清書作品を評価するだけではなく、原理・原則などの知識がどれだけ習得できたか、授業過程での文字調べの方法・手順、自選文字をめあてに沿ってどのように書くことができたかなど、さまざまな評価の観点を生み出すことが可能になるのです。

このように、書写に対する学生の固定概念を払拭（はら）することで、将来の書写指導に少しでも夢と希望をもって積極的に取り組んでもらいたいと考えています。